

女性発達における月経の意義と月経不要論

—— 大学生の月経に関する認識からの検討 ——

川瀬良美*

問題と目的

女性の二次性徴の一つとして発現する月経周期の発達は、女性の性機能の象徴として女性性および母性の発達に関連している（高村, 1993 高村, 1996）。しかし、女性の月経への認識は必ずしも肯定的なものではなく、積極的な否定ではなくとも消極的否定または消極的肯定である（MSG研究会, 1990）。月経を積極的に肯定できない要因としては月経随伴症状の存在があり、行動の制約、手当の煩雑などがその理由としてあげられる（川瀬, 2006）。その月経を女性が受容しているのは、女性だけにしかない特性である出産機能に伴う現象であるからである（川瀬, 2006）。

ところが、近年、医学の立場から月経がもたらす障害を問題として、その抑制を主張する論議が展開されている（Segal, 2001, 玉田, 2001, 松本, 2001）。その主旨は、初経の早期化と少子化傾向によって、女性が生涯で経験する月経周数の増大が様々な医学的な問題をもたらしているというものである。それを月経の医学的障害として、日本産科婦人科学会は第53回大会に米国ポピュレーションカウンシルのSegal博士を招請し講演を依頼して（Segal, 2001）、繰り返される月経の障害について産婦人科医の共通理解を深めようとした。

Segal博士の講演抄録および日本家族計画協会の機関誌「家族と健康」に掲載された日本家族計画協会医学委員会委員長（玉田, 2001）による、「第53回日本産科婦人科学会のシーガル博士の講演報告」から、その概要を整理すると以下の5点である。

1. 月経週数の増加

初経が早くなり閉経が遅くなる傾向と、妊娠・出産・授乳の回数ならびに期間の短縮により、月経回数が飛躍的に増加している。アメリカ開拓時代は150周期で、現代はその3倍の450周期となった月経周期の増加が、医学的障害の増加の原因と考えられる。

* 淑徳大学 総合福祉学部 実践心理学科 教授

2. 月経に関連した医学的障害

月経と直接関連した医学的障害として、月経困難症、月経前症候群（PMS）、子宮内膜症、鉄欠乏性貧血などが発症している。

3. 月経時に悪化させる医学的障害

既存の慢性疾患、偏頭痛、喘息、リウマチ性関節炎、てんかん、過敏性大腸症候群、等が月経時に悪化する。

4. 月経周期数と比例して発症する医学的障害

月経週数の増加に比例して卵巣癌、子宮内膜癌が発症するとの報告がある。

5. 月経の抑制による利点

月経周期数が少ないほど、月経関連医学的障害が少ない。その意味からは、ホルモンによる排卵抑制による無月経期間をつくることにより、月経関連障害を減少することができ、健康上の恩恵が増える。上記のように講演では、対策としては月経を抑制することであるとするが、その是非、方法などの詳細についてはエビデンスを基にした共通理解が得られているとはいえない。

女性の性の象徴としての月経であるが、女性が必ずしも積極的に受容していない現状においてその抑制論が先行して展開されることは、発達心理学の立場から月経の発達と受容、ひいては女性性、母性の発達への影響が危惧される。これまで、女性の発達における月経問題は積極的に研究されてこなかったことで、女性の発達過程においてどのような影響をもたらすかを予測する知見が十分であるとは言えない。

月経の発達は、人間発達の側面として中心的テーマではないと軽視する視点がある中で、生命現象としての月経は女性の心理的発達においては無視することができないとする立場がある（川瀬、2006）。女性は月経があることを健康の象徴とし、生理的なリズムを感受し、自らの心身の健康を推測する指標としている。そこでは必ずしも、月経がなければよいとは考えてはいない。月経を操作的に抑制することが身体的発達のみならず、心理的発達、女性のアイデンティティ獲得にどのように影響を及ぼすのか、発達心理学ではどのような知見をもってその指針を示すことができるのか、その方向性を模索していかなければならない。その観点から、大学生の月経への認識の実態について質問紙調査を実施したので報告する。

方 法

本研究では、大学生を対象に、「月経についての認識に関して」質問紙調査を授業の中で実施した。質問項目は、①月経が必要な理由、②月経が無かったら困る理由、③月経が無ければ良いと考えることの有無とその理由、④月経の医学的障害についての認識、⑤月経を人工的に操作することの可否について、の以上5点について、自由記述法で回答を求めた。

本研究の統計解析には、統計解析プログラムパッケージThe SAS System for Windows v.8を用いた。

結 果

1. 対象者の属性

(1) 有効回答数 181名 (内, 男性49名 (27.2%), 女性131名 (72.8%), 不明1名)

(2) 学科別人数

実践心理学科 (心理学科) 131 (72.8%)

人間社会学科 (社会学科) 5 (2.8%)

社会福祉学科 41 (22.8%)

その他 3 (1.7%)

不明 1名

(3) 学年別人数

2年生74名 (40.9%), 3年生73名 (40.3%), 4年生28名 (15.5%), その他6名 (3.31%)

(4) 平均年齢 20.77 (SD 2.40)

2. 手続き

自由記述で回答を求めた各設問についての回答は、以下の手続きによってコーディングを行った。

(1) 自由記述で、①～④まで4項目を記述することができる記述欄に記述された内容について、概念的に同一あるいは類似な内容でまとめて、筆者と他の1名で確認してカテゴリーを決定した。

(2) 各自の記述内容について、該当するカテゴリーへの記述の有無を「1」あるいは「0」で入力した。

3. 結果

結果1 「月経はなぜ必要であるか」について、自由記述で記入してもらった。

1-1 記述数

4項目記述することができる回答欄に記述された総回答数は306項目で、一人あたりの平均記述数は1.69項目であった。各回答者が記述した項目数の分布は、表1の通りであった。

表1より、最も多かったのは1項目記述した者であった。続いて、2項目、3項目の順に記述者数が減少し、4項目記述した者は5名であった。80%強が1～2項目の記述であった。

表1 月経の必要な理由の各回答者ごとの記述数

項目数	人数	(%)
0	3	(1.7)
1	83	(45.8)
2	67	(37.0)
3	23	(12.7)
4	5	(2.8)
合 計	181	(100.0)

1-2 記述内容

記述内容は、8つのカテゴリーに分けることができ、その結果は表2に示した通りであった。

表2より、最も多かったのは「出産機能」に関する「子どもを産むこと」(156名、51.0%)に言及したものであった。また、「健康の証・健康を知る手段」、「女性としての証・女性の象徴」、「身体的成熟・成長の証」など、女性の発達と月経の象徴的意味について各々5%前後ずつであったが記述されていた。月経の生理的機能としての本質的な目的である「子宮内の不要な物の排出のため」と記述したのは4名(1.3%)であった。

表2 月経が必要な理由のカテゴリーと記述数

カテゴリー内容	記述数	(%)
子どもを産むため	156	(51.0)
ホルモンバランスを調節する	35	(11.5)
健康の証・健康を知る手段	19	(6.2)
女性としての証・女性の象徴	17	(5.6)
身体的成熟・成長の証	15	(4.9)
種の保存・子孫を残すため	13	(4.2)
生理的リズム・身体のサイクル	10	(3.3)
子宮内の不要な物の排出のため	4	(1.3)
誤りの記述	37	(12.0)
合 計	306	(100.0)

結果2 「月経が無かったら困る理由」について、自由記述で記入してもらった。

2-1 記述数

4項目記述することができる回答欄に記述された総回答数は257項目で、一人あたりの平

表3 月経が無かったら困る理由の各回答者ごとの記述数

記述数	項目数	(%)
0	15	(8.3)
1	92	(50.8)
2	59	(32.6)
3	13	(7.2)
4	2	(1.1)
合 計	181	(100.0)

均記述数は1.42項目であった。各回答者が記述した項目数の分布は、表3の通りであった。

2-2 記述内容

記述内容は、10のカテゴリーに分けることができ（その他と誤りを除く）、その結果は表4に示した通りであった。

表4より、最も多かったのは「出産機能」を失うとする「子どもが産めない」（132名、51.4%）に関する内容であった。それに続くカテゴリーは、人数に多少の相違はあるが、「必

表4 月経が無かったら困る理由のカテゴリーと記述数

カテゴリー内容	記述数	(%)
子どもを産めない	132	(51.4)
ホルモンバランスが崩れる	29	(11.3)
健康でなくなる	13	(5.1)
健康を知る手段がなくなる	8	(3.1)
女性と言えなくなる	7	(2.7)
子どもをつくる時期が分からない	6	(2.3)
周期的リズムがくるう	6	(2.3)
女性としての発達が確認できない	5	(1.9)
不要な物が体内にたまる	5	(1.9)
受精卵が着床できない	2	(0.8)
その他	13	(5.1)
明らかに誤った記述	31	(12.1)
合 計	257	(100.0)

要な理由」に対応する内容でカテゴリー概念としては同一であった。月経が無くなると、必要な目的が果たされないという理解と言える。必要な理由の中になかったカテゴリーとしては「子どもをつくる時期が分からない」であった。月経はその周期から排卵の時期を知ることができることを理解しての回答と思われる。また、月経は受精卵が着床するための準備である子宮内膜の剥離であることから「受精卵が着床できない」（2名，0.8%）との記述があった。

結果3 「女性に月経がなければ良いと考えることがありますか」について、「はい」「いいえ」の二者択一で選択してもらった後で、各々の理由について自由記述で記入してもらった。

3-1 「はい」「いいえ」と回答した人数

月経が無ければ良いと思うかについての回答は表5に示した通りであった。表5より、無ければ良いと思うことが有ると回答したのは141名（77.9%）であった。一方、無いと回答したのは40名（22.1%）であった。性別に検討すると、女性で有ると回答したのは117名（89.3%）で、女性の約9割が「月経が無ければよいと思うことがある」と回答した。

男女の比率をカイ二乗検定を行ったところ、女性が有意に「はい」（ $\chi^2=37.05$, $p<.001$ ）と回答していた。

表5 月経が無ければ良いと思うかの有無

属性別	人数 (%)	
	はい	いいえ
全体	141 (77.9)	40 (22.1)
女性	117 (65.0)	14 (7.8)
男性	23 (12.8)	26 (14.4)

性別の検討 $\chi^2=37.05$, $p<.001$

(性別不明 1名)

3-2 「はい」と答えた人の理由（141名）

4項目記述することができる回答欄に記述された「はい」の理由の総回答数は332項目で、一人あたりの平均記述数は2.35項目であった。本研究の設問において自由記述された回答数が最も多かったのが本設問の「月経がなければ良いと思う理由」であった。各回答者が記述した項目数は、表6の通りであった。表6より、記述数は1から6までに分布した。記述欄の4項目を超えて5項目、6項目と欄外に記述した者がおり、他の設問ではこのような結果は見られなかった。

表6 月経が無ければ良いと思う理由の各回答者ごとの記述数

記述数	人数	(%)
1	41	(29.1)
2	41	(29.1)
3	33	(23.4)
4	21	(14.9)
5	4	(2.8)
6	1	(0.7)
合 計	141	(100.0)

3-3 月経が無ければよいと思う理由

月経が無ければ良いと思う理由をカテゴリー別に分類すると、1. 随伴症状に関連して：184項目（55.4%）、2. 行動の制限に関して：68項目（20.5%）、3. 生活に関連して：63項目（19.0%）、4. その他：17項目（5.1%）に分類できた。その下位カテゴリー内容と記述数は表7の通りであった。

下位項目で最も多かったのは「随伴症状に関して」で、特に、「下腹痛・腰痛・頭痛」という痛みに関する項目は（85項目、25.7%）4分の1以上を占めていた。「行動の制限に関すること」（68項目、20.5%）と「生活に関連して」（63項目、19.0%）が各々約2割を占めていた。

3-4 月経がなければよいと思うかに、「いいえ」と答えた人（40名）の理由

4項目記述することができる回答欄に記述された「いいえ」の理由の総回答数は49項目で、一人あたりの平均記述数は1.03項目であった。各回答者が記述した項目数の分布は、表8の通りであった。

3-5 月経が無ければよいと思わない理由

月経が無ければ良いと思わない理由をカテゴリー別に分類すると、表9のとおりであった。その理由は、月経が必要な理由に概念的には対応するものであった。女性にとって必要な機能・現象を失っても良いとは思わない、という認識と考えられる。

表7 月経が無ければ良いと思う理由のカテゴリーと記述数

カテゴリー	下位カテゴリー内容	記述数	(%)
随伴症状に に関して	下腹痛・腰痛・頭痛	85	(25.7)
	全身不調・体調悪化	38	(11.4)
	精神的に不安定・イライラするとき	32	(9.6)
	男性からみた女性の随伴症状	11	(3.3)
	肌のトラブルが起こったとき	8	(2.4)
	貧血になる	6	(1.8)
	食欲の変化	4	(1.2)
	小 計	184	(55.4)
行動の制限 に関して	プール・海に入れない	22	(6.7)
	旅行・外出の時	13	(3.9)
	風呂・温泉に入れない	12	(3.6)
	運動ができない	12	(3.6)
	安心な睡眠が得られない	6	(1.8)
	アルバイトの時	3	(0.9)
	小 計	68	(20.5)
生活に関連して	ナプキン交換・トイレの回数増加	21	(6.4)
	面倒くさいと感じる時	15	(4.5)
	衣服が汚れる・衣服の制限	13	(3.9)
	かぶれる・蒸れる時	7	(2.1)
	ナプキンの代金がかかる	5	(1.5)
	不快感があること	2	(0.6)
	小 計	63	(19.0)
その他	出血を見る瞬間	5	(1.5)
	周期を気にかける時	5	(1.5)
	男性だったらと思う	3	(0.9)
	明らかな誤り	4	(1.2)
	小 計	17	(5.1)
	合 計	332	(100.0)

表8 月経が無ければ良いと思わない理由の各回答者ごとの記述数

記述数	人数	(%)
0	2	(5.0)
1	30	(75.0)
2	6	(15.0)
3	1	(2.5)
4	1	(2.5)
合 計	40	(100.0)

表9 月経が無ければよいと思わない理由のカテゴリーと記述数

カテゴリー内容	記述数	(%)
子どもを産めなくなるから	14	(28.7)
健康の証であるから	13	(26.5)
女性である証だから	10	(20.4)
身体にとって必要だから	3	(6.1)
女性と実感できるから	3	(6.1)
考えたことがない	3	(6.1)
男としてわからない	3	(6.1)
合 計	49	(100.0)

結果4 女性に月経があることが「障害」になるということを聞いたことの有無について

4-1 月経があることが障害になるということを聞いたことの有無

月経があることが障害になるということを聞いたことの有無についての「はい」「いいえ」の頻度は、表10の通りであった。表10より、「いいえ」が156名(86.2%)で、聞いた事がないが圧倒的に多かった。また、性別による検定での有意差は得られず、男女とも知らない者が多かった($\chi^2=0.008$, $p<1.00$)。

表10 月経の障害について知っていたかの有無

属性別	人数 (%)	
	はい	いいえ
全体	25 (13.8)	156 (86.2)
女性	18 (11.0)	113 (62.7)
男性	7 (4.9)	42 (23.2)

(性別不明 1名)

4-2 「はい」と答えた人の理由

月経が障害になることを聞いていた人には内容を記述してもらった。記述したのは25名(13.8%)で、その内容の総記述数は32項目であり、一人あたりの平均記述数は1.28であった。各個人の記述数の分布は表11の通りであった。

表11 月経が障害になることに「はい」と答えた各回答者ごとの記述数

記述数	人数	(%)
0	1	(4.0)
1	18	(72.0)
2	4	(16.0)
3	2	(18.2)
合 計	25	(100.0)

4-3 「はい」と答えた人が記述した内容

月経が「障害」になることを聞いたことがある人が記述した内容は表12の通りであった。表12より、随伴症状のカテゴリーが最も多く「障害」として認識とされていた。また、就労への影響、男女差別を喚起すること、月経への偏見などジェンダー問題と関連したカテゴリーが記述された。加えて運動における障害などのカテゴリーであった。

表12 月経が「障害」となる認識のカテゴリーと記述数

カテゴリー内容	記述数	(%)
随伴症状などが害になる	11	(34.4)
就労・労働に影響する	5	(15.6)
男女差別を喚起する	9	(28.1)
月経にまつわる偏見がある	5	(15.6)
運動の障害になる	2	(6.3)
合 計	32	(100.0)

結果5 健康な月経を、人工的に操作することへの可否について

5-1 健康な月経を、人工的に操作することについて「はい」「いいえ」と回答した人数
女性の健康な月経周期を、人工的に(薬を用いたりして)止めたり復活させたりすることは問題があるかについて「はい」と「いいえ」で回答してもらった。

「はい」と回答したのは129名(71.3%)で、「いいえ」と回答したのは52名(28.7%)であった。約4分の3が、月経を人工的に操作することは問題だと考えていた。次に性別で有

表13 月経を人工的に操作することは問題であるかについての可否

属性別	人数 (%)			
	はい		いいえ	
全体	129	(71.3)	52	(28.7)
女性	91	(50.5)	40	(22.2)
男性	37	(20.6)	12	(6.7)
性別の検討	$\chi^2=0.63, p<0.50$			

(性別不明 1名)

意差があるか検討したところ、有意差はなかった ($\chi^2=0.63, p<0.50$)。

5-2 月経を人工的に操作することは「問題ある」と回答した人の記述数

月経を人工的に操作することは「問題ある」と回答した人が、4項目記述することができる回答欄に記述した総記述数は176項目で、一人あたりの平均記述数は1.38項目であった。各回答者が記述した項目数の分布は、表14の通りであった。記述は1～3項目であったが、約7割(69.0%)の回答者は1項目であった。

表14 月経を操作することを問題とする各回答者ごとの記述数

記述数	人数	(%)
1	89	(69.0)
2	33	(25.6)
3	7	(5.4)
合計	129	(100.0)

5-3 月経を人工的に操作することは「問題ある」とする理由のカテゴリーと記述数

健康な月経を人工的に操作することには問題があるとする理由と記述数は、表15の通りであった。内容は、「身体的影響」(136項目, 77.3%)と「自然尊重」(40項目, 22.7%)に分類することができた。さらに下位カテゴリー別に整理した結果は表15のとおりであった。

身体的影響の下位カテゴリーは、「身体を操作することは影響がある」「副作用がある」とする者は合わせて49.5%であった。これは、具体的にどのような影響があるかは説明できないが影響があるだろう、という理解と言える。その他、具体的に月経の機能に関連した影響としての記述が27.8%であった。ここでは、月経機能への影響のみならず、健康な身体への影響についての不安があることが示唆される。

表15 月経を操作することは問題があるとするカテゴリと記述数

カテゴリ	下位カテゴリ内容	記述数	(%)
身体的影響	身体を操作することは影響がある	72	(41.0)
	身体のバランス・リズムを崩す	18	(10.1)
	副作用が起こる	15	(8.5)
	月経周期に影響がでる	14	(8.0)
	妊娠が困難になる	11	(6.3)
	ホルモンバランスが崩れる	6	(3.4)
	小 計	136	(77.3)
自然尊重	自然にまかせるのがよい	28	(15.9)
	薬はよくない	7	(4.0)
	女性に月経があるのは神聖で自然なこと	5	(2.8)
	小 計	40	(22.7)
	合 計	176	(100.0)

5-4 月経を人工的に操作することには「問題がない」と回答した人の記述数

4項目記述することができる回答欄に記述された総記述数は73項目で、一人あたりの平均記述数は1.40項目であった。各回答者（52名）が記述した項目数の分布は、表16の通りであった。記述数は1および2そして4項目であったが、63.5%は1項目であった。

表16 月経を操作することは問題ないとする各回答者ごとの記述数

記述数	人数	(%)
1	33	(63.5)
2	18	(34.6)
4	1	(1.9)
合計	52	(100.0)

5-5 月経を操作することは「問題ない」とする理由のカテゴリと記述数

健康な月経を人工的に操作することは問題がないとする52名が記述した73項目のカテゴリと記述数は、表17の通りであった。内容は、「問題ない意識」（25項目、34.2%）、「個人尊重」（17項目、23.3%）、「身体的効果・副効用」（17項目、23.3%）そして「行動での利便性」（14項目、19.2%）に分類することができた。さらに下位カテゴリ別に整理した結果は表17の通りであった。

表17 月経を操作することは「問題ない」とするカテゴリと記述数

カテゴリ	下位カテゴリ内容	記述数	(%)
問題ない意識	問題ない	25	(34.2)
個人尊重	それぞれの事情があればよい	11	(15.1)
	個人の問題として尊重する	6	(8.2)
	小 計	17	(23.3)
身体的効果・副 効用	避妊に効果がある	7	(9.6)
	周期を整えることができる	7	(9.6)
	体調を崩さないですむ	3	(4.1)
	小 計	17	(23.3)
行動での利便性	スポーツ選手に都合がよい	6	(8.2)
	プール・海水浴などに都合がよい	4	(5.5)
	行事にあわせて止めるのは有益	4	(5.5)
	小 計	14	(19.2)
	合 計	73	(65.8)

単に問題ないとする者は3割強であったが、積極的にその効果を認めた者は4割強であった。問題ないとする者の中では積極的に容認する考えがあることが示された。

考 察

1. 月経が必要な理由と無ければ困る理由についての考察

「月経の必要な理由」については、「1. 子どもを産むため」としての次世代を産生する機能としての月経が最も多くに認識されていた。「6. 種の保存」の認識もこれと類似の認識である。これらは、二次性徴として発現する月経の発来によって、女性は出産能力を有する身体となったと教えられることからの理解である。また、「5. 身体的成熟・成長の証」の記述も、二次性徴の発現が発達段階のある水準へ到達したことを意味する発達心理学的意義が認識されている。月経が女性だけが有する機能であることから、「4. 女性の象徴・女性の証」としての意義が認識されている。これらの認識は、学校教育を中心にさまざまな機会に教えられた内容と体験的知識の蓄積を含めて、月経をいかに意味づけているかが記述に反映されていると考えることができる。

「月経」とは「通常、約1ヶ月の間隔でおこり、限られた日数で自然に止まる子宮内膜からの周期的出血」（日本産科婦人科学会、1990）と定義されている。その目的は、受精卵が着床するための排卵にともなった周期的現象である。その現象は、視床下部、下垂体、卵巣、そして子宮が関連する一連の機序によって起こる。このことの意味によるのであろう、

「2. ホルモンバランスの調節」「7. 生理的リズムの調整」の記述がある。しかし、厳密な医学的定義から検討すれば「8. 不要な子宮内膜の排出」以外は誤りである。ところが、月経を体験している女性達は、月経が単に剥離した子宮内膜の排出による出血というだけのものではなく、生理的リズムやホルモンバランスにも関連した「3. 健康の証・健康を知る手段」として認識しているのである。単に、健康を知る手段であるのみならず、月経がないことは「健康でなくなる」こととして認識している。そして、その現象は「女性の証」であり「女性の象徴」であると認識している。「月経が無かったら困る理由」が「月経が必要な理由」に対応して、その中心は「出産機能」であったことは、出産機能を有するべき時期に有していないことは女性としての「アイデンティティ」獲得に影響することを示している。

月経が必要な理由や無くては困る理由に示された認識は、月経が単に身体部位としての子宮だけの現象ではなく、全身的な機序として発現する機能として認識され、身体生理的な機能のみならず女性としての発達、女性性・母性の発達を象徴する現象として認識されていることを示している。

2. 月経が無ければ良いと考えることについての考察

「月経が無ければよいと考えるか」については、回答した女性（131名）の内の117名（89.3%）が「無ければよいと思うことがある」と回答した。それは男性（49名の内23名：46.9%）と比較しても有意に多かった。

その理由として記述された数は、本研究において最も多く、既設の4つの記述欄を超えて記述された。この結果は、女性が日常的に月経が無ければよいと考える機会が多く、しかも多様な理由を体験していることを示している。記述された内容は4つのカテゴリーに分類することができた。その半分以上を占めていたのは「随伴症状に関して」であった。中でも、「痛みに関する」症状は、全体の4分の1、随伴症状下位カテゴリの2分の1に該当し、痛み症状が月経を拒否させる原因となっていることが示された。

月経随伴症状は月経を有する女性の全ての年代において月経前（58.4～93.5%）、月経中（70.0～95.5%）を通じて自覚されている（MSG研究会，1990）。重篤度は異なるとはいえ、多くの女性が周期的な月経に伴う随伴症状に苦しんでいる現状がある。特に、月経困難症などの痛み症状は、随伴症状を増幅し生活の質を著しく低下させている（川瀬，2004，Kawase & Matsumoto，2006）。「月経痛については、相当な女性が体験しているが、必ずしも適切な対処が行われているとは言えない」（厚生省，1999）と報告されたが、政策として具体的対策はとられていない。月経は健康を象徴する生理的な現象であるが、現状では苦痛・不快を伴うことにより、結果として「月経を否定する」一因となっている。月経随伴症状が、月経が無ければよいと考える理由としてあげられていたことは、教育現場、医療現

場、その他関係者の怠慢を示唆している。月経の医学的障害で指摘された「2. 月経に直接関連した医学的障害」が、多くの女性達に体験されていることを実証する結果である。この観点からの考察は後述する。

その他のカテゴリーとしては、「行動の制限」と「生活での負担」が各々4分の1ずつあった。月経が「行動を制限する」との認識は、月経時に非月経時と同質の生活が保証されることが前提の認識である。月経時に非月経時と同質の生活を保障できない背景には随伴症状があるが、その他に経血の処理の問題がある。月経用品の改良は、「いつもと同じ生活」を保証することを謳い文句に宣伝活動をしている。その内容は、「旅行にもいけます」「スポーツ、水泳だってできます」「好きな洋服、白いパンツだって着ることができます」と宣伝している。月経用品の品質はその高品質のみならずTPOに合わせて選べる品揃えも豊富で、日本においてはもはや改良の余地がないといわれるまでになっている。しかし、まだ改良の余地があるのか、経血量の個人差の問題か、失敗経験からもたらされる不安というような心理的問題であるのか、多様な原因が影響していると考えられるが、行動の制限から月経を否定する心理がもたらされている。

望むときに望むことが叶えられるのが当たり前と考える心性は現代の時代性を反映しているともいえる。しかし、男女が平等に社会生活を送ることを保証しようとしている現代は、男性にはない月経によって女性だけが不自由を強いられているとの心理ももたらされるであろう。

日本においては平安時代の中期以後、月経時の女性を「他屋」と言う建物に隔離し、食物が差し入れられたという（田中、1934）。その習慣がいつまで残っていたかは地域によっても異なるであろうが、月経時には通常の生活から隔離されていた歴史がある。それは、差別の歴史と見る見解もあるが、見方を変えれば、月経時は地域社会、家族によって公認の休息が与えられていたとも言える。それは、女性にある種の不自由を強いたであろうが、女性の特質に対応した社会的仕組みとも言える。現代は、月経時に非月経時と同じ行動をとれるのが当たり前とする社会的要求とそれに応えようとする心理が不自由を認識させている。

「生活に関連して」の負担は、月経時に余分な負担を追わされることによる厄介な心理である。月経に伴い発生する事象を厄介な事と感ずる心理は、これは、単に余分ことを面倒だとする心理と、女性だけが特別な負担を強いられているとの不公平感からもたらされる心理とがあるといえるだろう。これらは、女性性の受容に関連するが、発達の的にその様な負担感は軽減され、受容度が高まると報告されている（MSG研究会、1990）。

次に、月経が無ければよいとは考えない理由としては、月経が必要な理由と対応している。月経の必要性の認識によって月経が無ければよいと思ったりはしない、との認識であろう。月経が無ければよいと思う理由は、体験による苦痛や厄介という現実的な問題を背景と

している。一方、月経が無ければよいと思わないという理由は、月経の意義の認識によるものであった。そこに、月経へのアンビバレントな心理が生まれ、月経を否定はしないが積極的に受容することもできない、という心理になるのであろう。しかし、月経が無ければよいと思う最大の理由である随伴症状は、これまで積極的に対応していなかった問題といえた。

3. 月経が「障害」になることを聞いたことがあるかについての考察

月経が「障害」になることについて、知っていたのは25名(13.8%)のみであった。回答者の8割以上(86.2%)が聞いたことが無く、それは男女でも差が無かった。少数が聞いていた内容は、随伴症状、就労における不利益、月経にまつわる偏見・女性差別、運動の障害などであった。これらは、直接あるいは間接に月経に起因する問題点として指摘されている内容である(川瀬, 2006)。これらの内、医学的障害として指摘されている「随伴症状」を指摘したのは、月経の障害について聞いていた者のおよそ3分の1であった。しかし、その数は今回の全調査対象者の6.1%にしかあたらなかった。今回の調査で、女性(131人)の117人(89.3%)が月経随伴症状によって月経が無ければよいと思うと回答していながら、そのうちの113人(96.6%)はそれを「障害」として認識してはいなかった。

月経随伴症状が健康な身体の生理現象に伴っておこる症状であるとの認識から、随伴症状が起こっているのは自分の身体に原因があるからではないかと考える女性が多い。不安を抱えながら、その問題解決のために、積極的な行動を行っていない者が54.7%(MSG研究会, 1990)にもなる。月経随伴症状の実態について学び、率直に語り合うことによって、それが自分だけの問題ではないことを知ると、多くの女性が心理的な安心を得る(川瀬, 2004)。月経に伴う「医学的障害」との観点を学ぶことによって、随伴症状への認識がどのように変化するかを、今後、検討する必要があるであろう。

その他は、直接的な月経への偏見、月経を理由にした差別など社会的偏見にまつわる認識である。また、月経時の就労に関しての女性の能力的変化や労働コストなどを視野にいたした認識もあった。男女雇用機会均等法が施行された現在では、法的には平等であっても、実質的な労働環境という点で、月経が女性の社会的立場、社会進出に影響を及ぼしているとの認識があることが示された。

月経の障害については、知らない者が殆どであったが、少数ながら事実を認識している者はいた。今後、月経随伴症状を「月経の医学的障害」との観点から考えることについて、月経と健康との関係を正しい理解によって認識するために、社会的なコンセンサスを得た内容で教育的介入を行うことが必要であろう。

4. 健康な月経を人工的に操作することの是非についての考察

健康な月経を人工的に停止させたり復活させたりすることは129名(71.3%)の回答者が問題があるとした。その理由は、身体的影響があるとするものが77.3%、自然尊重ともいえるそのまま自然が良いとするものが22.7%であった。これらのいずれもの考えの根底にあるのは、生理的現象である月経には、人工的な介入は望ましくないという考えである。

「身体的影響」は、介入(抑制)することによる安全の保証が得られているのかについての不安がうかがえる。介入(抑制)することで、月経のメカニズムへの影響のみならず全身への悪影響がでるであろうとの認識である。これらの内容が医学的にみて妥当であるかはともかくとして、月経へ操作的な介入をすることへの懐疑的な不安があることが示されている。月経の医学的障害への対策として、介入(抑制)が有益であるとしても、その導入においては、正確な情報の提供と心理的段階を踏んだ手続きが必要であろう。

また、悪影響とは異なった観点から「自然尊重」との認識が示された。自然にまかせるのがよい、との自然尊重に加えて月経を神聖視する認識も示された。

問題ないとする者(52名)は、ホルモン操作による身体的効果とし、避妊、周期調整、随伴症状の消失などをあげている。これらは、医学的障害への対策として提案されている方法であるが、医学的にもその効果が認められており、既に、医療機関で治療として用いられている。実際、これらの治療を受けた者がこの回答を記述した者の中にいたことは、排卵抑制による無月経により、健康上の恩恵を得ることを体験していることを実証的に示している。この経験者が少なかったことは、現状においては治療として受診する者の数の少ないことを反映していると思われる。

月経を人工的に操作することについては、大多数が悪影響がでると認識していたが、少数ながらその効果を認識している者がいた。この現実には、普及の是非も含めて、今後、どのように教育、啓蒙するか検討される必要がある。

5. 医学的障害の観点からの考察

日本産科婦人科学会第53回大会において、米国ポピュレーションカウンシルのSegal博士(Segal, 2001)は、「MENSTRUATION RELATED MEDICAL DISORDERS」と題した招請講演で、月経周数の増加に伴う問題を「月経に関連する医学的障害」との観点から、積極的に月経を抑制することが「健康上の恩恵」とであると述べている。女性が生涯で経験する月経周数は、アメリカ開拓時代と比較して、現代までのおよそ150~160年間くらいになるのであろうか、その間におよそ3倍になったとする。その月経周数の増加が、直接的な月経随伴症状の発症の増加、既存の慢性疾患の悪化、周数に比例した疾患の発症をもたらしているという。

女性の生涯に出産する子どもの数を考えると、初経から閉経まで繰り返される月経は、必要に応じて抑制することが健康のために恩恵となるとする。これらの事実については、筆者はまだ十分な知識を持ち得ていないが、今後、専門家の援助を得て正しい情報を得て筆者なりの理解に至りたいと考えている。取り敢えず、本稿では、これらの全てを事実として考察を進めていく。

月経があって良いことは何もないのであるから抑制すればよい、と一見妥当な医学的な提案に対して、そのまますんなりと受け入れられない背景には、この問題が「疾患を治療する」という単純な問題ではないことを意味している。この問題を考える視点をどこに据えたら良いのかを考えなければならない。自然の生理現象に操作的に介入するといことから、生命倫理の視点から考える方法があろう。

生命倫理の立場から小林（2008）は、次のような問題点のとらえ方を示している。「月経に直接関連する」月経随伴症状に対する治療としての「月経の抑制」は、月経に起因する疾病の治療として既に行われており、その治療行為は容認できるであろう。次に、「既存の慢性疾患で月経時に悪化するもの」については、その治療が月経を抑制する以外に改善されないのかが問われ、それ以外の方法がないのであれば「月経を抑制」することが治療として認められるであろう。しかし、「月経周期周数と比例して発症するもの」の予防となると、予防を目的とした月経の抑制が「治療」となるかは判断が分かれるところで、生命倫理の領域に該当する問題となる。すなわち、「予防」を目的として月経を人工的に抑制することは、遺伝子診断で乳ガンのリスクが高いということで事前に乳房切除の選択をすることと発想が同じであると指摘する（小林，2008）。遺伝子診断の展開は、将来罹患するであろう病名をそのリスクと共に明らかにして、現在は全く健康である人でも「病人」にしてしまう。果たして、これは治療といえるのかを問題とすると、月経周数に比例して、卵巣癌や子宮内膜癌が発症するとの知見から月経を抑制しようとする考えは、まだ疾患を発症していない女性達を病人として月経を抑制しようとするのが問題となる。

本研究の結果でも、月経随伴症状のために月経がなければよいと考える女性が多いことから、治療として月経を抑制することは苦痛からの解放となり、生活の質を高めることに寄与する。しかしこの問題は、従来の月経随伴症状への対応のあり方が怠慢ではなかったかと指摘できる問題を含むが、月経随伴症状の消失・軽減が、薬物による月経の抑制のみに依存しなければならないものであるかは、十分論議される必要がある。そして、月経時に悪化する疾患が、原因疾患そのものの治療を放棄する結果として月経の抑制がなされるのであれば、それも問題とされなければならない。他の方法がないという状況においてやむを得ない選択肢として提示されるものでなければならないからである。小林（2008）が指摘するように「むしろ果たされるべきは月経とそれに関連した障害との因果関係をより詳細に明らかにし、

適切な時期における健診の充実やその都度の治療方法などを充実させることではないか」である。

また、随伴症状を女性の生理的メカニズムの中で発症する月経の象徴とみなし受容してきた女性達は、随伴症状は苦痛であるが、それが妊娠・出産という女性の特性を発揮するための、ある意味で忍耐せざるを得ないこととしての認識さえもっている。その意味では、月経随伴症状を「医学的障害」として受容することへ認知を変えるためへの援助も視野に入れておく必要がある。本調査で、月経の障害については、殆どの回答者が認識をもっていなかったことがその必要性を示している。

月経を抑制することは、月経困難症など疾病の治療のためであることを前提条件とすることは一つのコンセンサスを得た事実であろう。既に医学的治療として実施されていることは、その点ではコンセンサスが得られていることを実証している。しかし、予防においてはいかがかと疑問を呈したときに、避妊のために排卵を抑制することが認められている現状では、望まない妊娠という危険回避のためという予防の目的で薬物利用が認められている問題を含めて考えなければならない。

本調査結果で、月経が必要な理由は出産のためであるが、同時に、女性としての象徴であり健康の証として認識されている。月経への認識として、疾病に罹患している状態であるから月経を抑制するのであり、健康になったら月経が復活する、月経があることが健康な身体なのである。これが女性達の月経観といえる。健康のために月経を抑制するとの考えは、これまでの認識を百八十度転換させる必要がある。本調査で、月経がなければ良いと思うことがあると答えた女性（118名）の内、月経を操作することは問題ないと答えたのは32名（27.2%）であり、問題があると答えたのが86名（72.9%）であった。月経がなければ良いと思う事があっても、人工的に操作することは問題だと考える女性が有意に多かったのである（ $\chi^2=5.34$, $p<.05$ ）。その理由は、人工的介入の身体的影響への危惧であり、自然のままがよいとの信念といえよう。

だが、月経が必要な理由が出産のためであるとき、40年から45年にわたる生殖年齢の期間に、計画的になされる1～3回程度の出産のために450回もの月経を経験していることをどのように考えることができるか。そこでは、小林（2008）が指摘するように、「医学的に抑制できる月経を、その煩わしきや苦痛、それにとまらぬリスクに耐えてまで引き受け続けなければならない理由とは何か」そして「必要なとき以外はない方がいいという欲求に私たちはどう向き合ったらよいかという問題」に直面しなければならない。月経は出産を目的とした機能であるが、医学の技術的進歩が必要に応じて抑制と復活という操作を可能とする水準に達したのであるならば、その恩恵を選択するのがよいとの論理が展開してくる。この観点からの月経問題は、「生命操作・人体改変が可能な時代に「人間」とはどのようなものであ

るべきかという生命倫理の問題に重なってくる」(小林, 2008)。医術が「患者の福祉のためにするものであり、加害と不正のためにはしないようにつつしみます, ……」とするヒポクラテスの誓い(小川, 1975), の立場からみても一義的に解決は見出せない。医療従事者が現在進めようとしている月経抑制の目的は、医学的障害を治療する、あるいは回避しようとする目的は加害にならないとする論理で推進しているのであろうからである。予防までその範囲を広げたとき、それは加害となるのかならないのかについてのコンセンサスを得る必要があろう。

現代技術の革新的発展がもたらした問題という点からは、その行為の倫理的問題としても考える必要がある。加害でなくとも、「人間は自然な「統一体」であり、それを健全に機能させることが治療的医学の目標であるとする仮定に基づいている。……」(カス, 2005), とする考えは、予防的介入について妥当とするか否か。健康な人間を病とする行為は、社会学者が「医療化」という言葉を用いてその危険性を警告していた。医療化は、「……これが招来する世界観、人間観の変容を通じた、ひとりひとりのアイデンティティ消失の危険性とこれから帰結する責任概念とそれに伴う法および倫理概念崩壊の恐れである」(カス, 2005)と主張する。

医学において「正常」という言葉がどのような意味をもつのかも考えなければならない。生命体は静的ではなく動的なものである。「医学は人間科学に関係のあるしかし欠かすことのできない光をそこにあてながら、負の価値をもつあらゆるものに対する防衛と戦いの自発的な努力を、その活動から延長していくのである。」(カンギレム, 1987)。そこでの主体は、人間がもつ生命体としての営みである。しかるに、人間の本質的機能を操作することに対しては「生命は、自己保存の可能な自己調整のはたらきを持った構造をそなえている。」(カンギレム, 1987) ことを見直し、そこから問題解決の道を探る努力をしたのかを、女性の身体機能への治療を超えた操作的介入を推進しようとする行為について、謙虚に再考する必要があるだろう。

19世紀後半から21世紀にかけての急激な環境の変化に、女性の身体が適応的に変化していないのであれば、本来の機能を抑制することで適応させようとするのではなく、進化的適応を援助することで、ヒトの生命体としての長期的展望が拓けるのではないか。なにはともあれ、このような時代性をもった医療行為への方向性をやみくもに「否」とするのではなく、問題点の明確化と正確な情報提供によって様々な立場からの知恵を結集し、身体的および心理的適応を援助する方策がはからなければならないであろう。その目的が、女性の福祉に寄与することを目指そうとしていることに相違はないはずだからである。

文 献

- カンギレム, J. (滝沢武久訳) 1987 正常と病理 法政大学出版局.
- カス, R., L. (編著) (倉持武監訳) 2005 治療を超えて-バイオテクノロジーと幸福の追求 大統領生命倫理評議会報告書 青木書店.
- (Kass, L. R. & Safire, W. 2003 Beyond Therapy : Biotechnology and the Pursuit of Happiness A Report of the President's Council on Bioethics : Dana. Press.)
- 川瀬良美 2004 女子学生の月経問題と教育プログラム 淑徳大学社会学部研究紀要, 38, 171-184.
- 川瀬良美 2006 月経の研究-女性発達心理学の立場から- 川島書店.
- Kawase, K. & Matsumoto, S. 2006 Peri-menstrual syndrome (PEMS) : Menstruation-Associated Symptoms of Japanese College Students According to Prospective Daily Rating Record, Journal of Japanese Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, 11, 43-57.
- 小林秀樹 2008 「『月経』は果たして必要なのだろうか?」という問について 筆者の問に対する私信による回答.
- 厚生省児童家庭局母子保健課 1999 生涯を通じた女性の健康施策に関する研究報告書について インターネット厚生省ホームページ (報道発表資料).
- 松本清一 2001 コメント 玉田太朗 「月経」は果たして必要なのだろうか? 米国・シーガル博士の講演より 家族と健康 第568号 (社)日本家族計画協会.
- MSG研究会 (代表 松本清一) 1990 月経に関する意識と行動の調査委, 自治医科大学看護短期大学内 (MSG研究会)
- 日本産科婦人科学会用語委員会 1990 月経に関する定義 日本産科婦人科学会誌, 42 (7), 6-7.
- 小川政泰 1975 古い医術について 岩波文庫.
- Segal, S. J. 2001 MENSTRUATION RELATED MEDICAL DISORDERS, 日本産科婦人科学会雑誌, 53(2), 208 (S-134)
- 高村寿子 1993 女性の生き方と月経-思春期女性の月経イメージと女性性・母性そして月経のセルフケアの様相から- 自治医科大学看護短期大学紀要, 22-35.
- 高村寿子・松本清一・矢内原巧 1996 思春期女性の自己確立に関する研究-年齢と月経周期の推移からみた女性性・母性および月経の同一化- 思春期学, 14, 2, 121-132.
- 玉田太朗 2001 「月経」は果たして必要なのだろうか? 米国・シーガル博士の講演より 家族と健康, 第568号 (社)日本家族計画協会.
- 田中香涯 1934 (2007) 23血穢考 (「新史談民話」所収) 穢れと差別の民俗学 礫川全次 (編) pp182-194 批評社.

The Various Purposes of Menstruation for Female Development and The Idea of Suppressing Menstrual Cycles as Beneficial to Women's Health

Kazumi KAWASE

This study analyzed college students' recognition about the purposes of menstruation for women. One hundred eighty one students were asked to write freely on the following five questions.

1. What are the purposes of menstruation?
2. If you didn't menstruate what problems would you have?
3. Are there any reasons why you wish you didn't menstruate?
4. Have you ever heard of any medical disorders of menstrual cycles?
5. Do you agree or not to suppressing healthy menstrual cycles to prevent possible medical disorders in advance.

The results showed that women's recognition of the purposes of menstruation was for childbirth and the making of adjustments to physiological body function to be healthy. The problems associated with menstruation were paralleled with the purposes of menstruation.

The most of the subjects have experienced the dislike of menstrual cycles. However, they did not agree with suppressing menstrual cycles with drugs because the existence of menstruation symbolized health for women.

The results of this study showed that most of the subjects didn't know about the new concept that menstruation could invite medical disorders, so before introducing medical treatment for the medical disorder of menstrual cycle, it would be necessary to ensure women's consensus.